

「第28回 奨励賞・功労賞」記念特別号

一般社団法人

日本女性科学者の会 NEWS



The Society of Japanese Women Scientists

No.133 Special Issue, 2023.9

I. 会長のご挨拶

2023年5月28日に開催された第10会定時会員総会にて会長を拝命しました。今年度で創立65周年、法人化後9年目を迎える日本女性科学者の会（以下、SJWS）は、「女性科学者の友好を深め、各研究分野の知識交流を図り、女性科学者の地位向上を目指すとともに、世界の平和に貢献すること」を目的として活動しております。このように歴史あるSJWSの会長を引き継ぐことに重責を感じる次第です。

理事の改選は2月に行われ、新理事10名を含む計21名の理事が就任したことで理事の半数が入れ替わり、フレッシュな顔ぶれとなりました。総会・理事会はハイブリッド開催で、理事全員が一同に会するというわけにはまいりませんでしたが、総会後のひと月の間に理事・監事全部で23名のうち、18名の方とは直接お話しをする機会を持ちました。初めてお会いする新理事の方に加え、継続理事でありながらも対面するのは初めての方もあり、改めて直接対話することの重要性を感じました。総会後の奨励賞・功労賞贈呈式では第28回目の受賞者へ賞の授与が行われ、奨励賞受賞者の記念講演会が執り行われました。当日の詳細は本誌をご覧ください。

会長に就任したことで事務局を移し、これまで代々会長が引き継いできた資料等が送られてきました。これを機に、SJWSの設立当初の資料に目を通しており

一般社団法人 日本女性科学者の会 会長 梅津 理恵

ますが、それらからは当時の先輩諸氏のSJWSに懸ける強い思いがひしひしと伝わってきます。私は入会当初から今日まで東北ブロックに所属しておりますが、当ブロックのアクティビティの高さは関東圏以外の所属で初めて会長に就かれた鈴木 益子先生のご尽力であろうと思っております。それももちろんのことではありますが、設立時より私が所属する金属材料研究所から複数名が会員として活動し、10周年記念の式典では「金属材料研究所婦人研究者一同」として祝電を送っていた記録を見つけ、その貢献度の高さに驚いております。それから50年以上を経て当研究所に事務局を置いたことに感慨の念を感じずにはおりません。

さて、設立時の頃に思いを馳せるにつれ、SJWSが目指す「世界の平和への貢献」とは何だろう、という考えに至っております。当時は日本が戦後10年を経過した頃であり、例えば猿橋 勝子先生は地球化学のご専門の立場から海洋の放射能汚染の調査研究で多大な評価を得、1963年の部分的核実験禁止条約成立へと繋がるような成果を挙げられました。世界平和実現のために科学者が寄与した例の一つでしょう。偉大なる先輩諸氏が道を切り拓いてくださったお陰で、まだまだ不十分とは言え、女性が能力を発揮できる時代になりつつあります。約280名の会員の叡智を結集してSJWSとしてどのような貢献が今の時代において出来るのか、考えて参りたいと思います。ぜひ、皆様のお力添えを宜しくお願い申し上げます。



目次

I. 会長のご挨拶	1
II. 第28回日本女性科学者の会 奨励賞・功労賞 受賞者のプロフィール	2
III. 奨励賞受賞者の講演要旨	4
IV. 受賞者の挨拶	6
V. 第28回奨励賞・功労賞贈呈式	8
VI. 第28回日本女性科学者の会 賞選考経緯	9
VII. ブロック長挨拶	9
VIII. 2022年度会務報告、2023年度事業計画	11

理事監事名簿 ○はブロック長

理事：○小川 美香子、樋田 京子、○山田 恵子、安藤 恵子、梅津 理恵、○森 義仁、板倉 恵子、上妻 馨梨、後藤 典子、武井 史恵、柳田 保子、○山本 真由美、小山 真紀、沼野 利佳、○川内 敬子、井上 幸代、ヴィレヌーヴ 真澄美、篠原 美都、山本 真紀、○福原 正代、原 嶋 奈々江

監事：小川 由起子、近藤 科江

顧問：大野 茂男

第28回日本女性科学者の会
奨励賞受賞



今西 未来 氏
(IMANISHI MIKI)

京都大学・化学研究所・略
准教授
博士(薬学)京都大学

研究課題：「RNAメチル化の酵素化学的検出法の開発と選択的制御への展開」

賞贈呈理由：受賞対象に関する要約：受賞者は、RNAメチル化修飾の独自の評価法を確立した。さらにこれを利用して、標的選択的なRNAメチル化修飾の制御に成功し、また、RNAメチル化と核酸の非標準構造との関係性を提起するに至った。代表的なRNA修飾塩基であるN6-methyladenosine (m6A)は様々な生命現象に関係するため、メチル化状態を解析し制御することは、生命科学や医療への貢献が期待される。受賞者は、RNA切断酵素MazFのm6A感受性を見出し、迅速、簡便かつ定量的なm6A検出法を開発した。この原理は、特別な装置や抗体を用いない画期的なm6Aの定量検出法として、多分野にわたり応用展開されている。また、このm6A評価法を評価手段として、人工RNA結合タンパク質とm6A制御タンパク質との融合体をデザインし、個々の配列でRNAメチル化状態を制御できる方法論を開発した。このようなアプローチは独自性が高く、生命科学研究の新しい展開につながる。

略 歴：2003年 京都大学化学研究所 助手
2007年 京都大学化学研究所 助教
2015年 京都大学化学研究所 講師
2019年 京都大学化学研究所 准教授

連絡先：〒611-0011 宇治市五ヶ庄 京都大学化学研究所 生体機能設計化学研究領域
TEL：0774-38-3212 E-mail：imiki@scl.kyoto-u.ac.jp

第28回日本女性科学者の会
奨励賞受賞



上村 麻衣子 氏
(UEMURA MAIKO)

京都大学大学院
医学研究科
脳病態生理学講座
特定助教

研究課題：「レヴィ小体病におけるLimbic-predominant age-related TDP-43 proteinopathyの病理学的、臨床的、遺伝的特徴」

賞贈呈理由：受賞者はレヴィ小体病(Lewy body disease, LBD)に合併するLimbic-predominant age-related TDP-43 proteinopathy(LATE)についての病理学的、臨床的、遺伝学的特徴を明らかにした。LBDに合併するLATE(LATE-LBD)とアルツハイマー病(Alzheimer's disease, AD)に合併するLATE(LATE-AD)では、その病理分布や形態学的特徴が異なる事を明らかにし、それぞれのTDP-43凝集体の広がりや元を、LATEステージ分類を行った。また、各症例の生前の認知機能低下の経時変化を調べ、LATE陽性症例では陰性症例よりも認知機能障害が強い事、またその程度は、本研究で作成したLATE-LBDステージの進行度と相関することが示された。最後に、LATE-LBDの遺伝子解析を行い、TDP-43プロテインオパチーのリスク多型として知られるTMEM106B rs1990622およびGRN rs5848の遺伝子多型が、LATE-LBDの発症頻度およびLATE-LBDステージの程度と関連することを明らかにした。これらの研究結果は、LBDやLATEの特徴や多様性を浮き彫りとし、今後の臨床試験においてそれら多様性を考慮に入れたリクルートの必要性を示している。

略 歴：2005年3月 宮崎大学医学部医学研究科卒業
2010年4月 京都大学大学院医学研究科博士課程入学
2015年5月 京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座（臨床神経学）特定研究員
2017年9月 京都大学博士（医学）修了
2018年7月 日本学術振興会海外特別研究員
2018年7月 米国ペンシルベニア大学神経変性研究センターポスドク研究員
2022年10月 京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座（臨床神経学）特任助教
2023年4月 京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座（臨床神経学）特定助教

連絡先：〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町54
TEL：075-751-3767 E-mail：maikohs@kuhp.kyoto-u.ac.jp

第28回日本女性科学者の会

功労賞受賞



功刀 由紀子 氏
(KUNUGI YUKIKO)

愛知大学
地域政策学部
名誉教授

功績概要：受賞者は、本会の理事、関西ブロック長、第8代会長(平成27年6月～令和元年5月)を歴任され、長年にわたり本会の運営発展に貢献された。内閣府の男女共同参画事業等で活躍され、愛知県、名古屋市等の各種委員を歴任され、国、地域における女性の活躍推進に多大な貢献を果たされた。教育・研究活動においては、食品学、リスクガバナンス論を専門とされ、「食品安全学」および食品安全政策の構築に農林水産省消費・安全局との協働を通して取り組まれた。また、愛知大学副学長、常務理事として大学運営でも活躍された。愛知県の各種委員も歴任され、地域の環境行政の推進にも尽力された。以上の業績は、いずれも持続可能な開発目標の達成に資するものであり、女性リーダーとして目覚ましいご功績をお持ちである。

略 歴：1973年 京都大学農学部 食品工学科 卒業
1978年 京都大学院農学研究科博士課程 修了(農学博士取得)
1978年 京都大学農学研究科 日本学術振興会特別研究員
1979年 京都大学教養部 非常勤講師
1981年 マックスプランク実験医学研究所(ゲッチンゲン、ドイツ) 研究員
1983年 京都薬科大学 助手
1995年 愛知大学教養部 助教授
1996年 愛知大学経営学部 教授
2008年 愛知大学 教学担当副学長、学校法人愛知大学常務理事・評議員
2011年 愛知大学地域政策学部 教授
2020年 愛知大学名誉教授、愛知大学教育研究支援財団理事、大阪成蹊女子短期大学(現・大阪成蹊短期大学)、岡崎女子大学などで非常勤講師

連絡先：〒606-8107 京都市左京区高野東開町1-7, 11-206
TEL：075-722-7330 E-mail：kunugi@aichi-u.ac.jpw

第29回(2024年度)『日本女性科学者の会奨励賞』 候補者 募集要項

対象者：広く理系の分野において研究業績をあげ、その将来性を期待できる方で、かつ本会の趣旨に賛同し、その達成のために努力していると認められる本会正会員および学生会員を対象とします。特に年齢、国籍、性別は問いませんが、管理職(教授、部長等)にある方はご遠慮下さい。自薦・他薦は問いません。

※応募と同時に入会申し込みも受け付けます。詳細はSJWS事務関係「入会案内」
https://sjws.or.jp/prize#encourage_require の項目をご覧ください。

応募書類：①本会所定の書式(上記ホームページからダウンロードして下さい)
②論文リスト
③関連する主要論文3編のPDF(賞応募課題の研究に関連する5年以内のもの。論文リストの番号に○をつける)

応募方法：Eメールにて提出(①に署名した用紙はPDF化して送付して下さい)。添付ファイルには応募者の氏名を記載し、圧縮せずにそのまま添付いただくか、別の方法(無料ファイル送付サービス、例えば「データ便」「GigaFile便」等)で応募書類をお送りください。

応募期間：2023年11月1日(水)～11月20日(月)必着

提出先：日本女性科学者の会 賞担当理事 宛 E-mail：award@sjws.or.jp

決定時期：2024年3月末頃(メールにて本人宛通知)

RNAメチル化の酵素化学的検出法の開発と選択的制御への展開

京都大学 化学研究所 今西 未来

ゲノムそのものを書き換えるゲノム編集は一般に不可逆的です。一方で、一過性のゲノムのコピーでありながら様々なプロセッシングを受けフェノタイプを決定するRNAを人為的に制御することは、生命現象解明や遺伝子に起因する疾病の治療に向けて重要です。しかし、RNA干渉法やアンチセンス法を利用したRNA切断など、現状では、RNAの人為的な制御法は限られています。様々なRNA代謝の中でも、近年、がんやウイルス感染、体内時計など様々な生命現象においてRNAのメチル化修飾、特にN6メチルアデノシン(m6A)の重要性が明らかになってきました。RNAメチル化状態の制御は、生命科学や医療への貢献が期待されますが、従来法である酵素ノックダウンや阻害剤による機能解析は、細胞内のRNAメチル化レベルの一樣な変化をもたらしてしまうという限界があります。したがって、個々の配列でRNAメチル化状態を制御することによってこそ、様々な生命現象におけるRNAメチル化の意義を私は明らかにできると考えました。これを実現するためには、RNAメチル化を評価するためのm6A検出系が必須ですが、研究開始当初は、抗体を用いた検出もしくは質量分析による評価法が主でした。前者は配列特異的な解析が可能です但し定量性を欠き、また後者は、定量性は高いが配列ごとの分析はできず、また装置が必要です。そして、両者とも手間と時間を要するという問題点がありました。そこで私は、RNA配列選択的なRNAメチル化制御法の開発を目的として、まずは、m6Aの簡便かつ定量性のある検出法を開発した上で研究を進めてきました。

m6Aの酵素化学的検出法の開発 大腸菌由来のRNA切断酵素MazFはACA配列を切断することが知られています。一方、私たちは、この酵素が(m6A)CA配列は切断しないことを見出し、m6A感受性のRNA切断酵素を初めて報告しました。MazFによるRNA切断パターンを指標に、アデノシンのメチル化状態はゲル電気泳動で簡便に評価することができました。また、蛍光団と消光団を併せ持つRNAプローブのMazFによる切断を蛍光で検出することにより、プローブ中のアデノシンメチル化状態、すなわちメチル化調節酵素の活性をハイスループットかつ定量的に検出することに成功しました(図1)。そして、MazFを用いたm6Aの検出を脱メチル化反応やメチル化反応の酵素活性の検出に応用することによって、次に示す、RNA配列選択的なRNAメチル化制御の研究を実施することができました。また、m6A脱メチル化酵素FTOの阻害剤は抗がん活性を示すことが期待されることから、開発したハイスループット検出系を用いて、酵素阻害剤の探索研究も進めています(図2)。

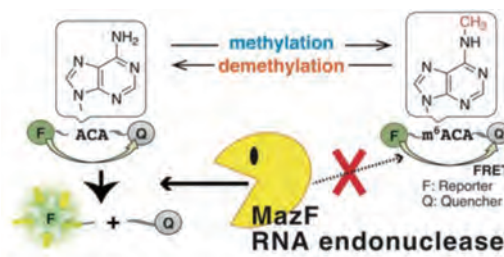


図1 RNA切断酵素MazFのm6A感受性の発見およびRNAメチル化の簡便検出法の開発

RNA配列選択的なRNAメチル化、脱メチル化の制御など私たちはこれまでに、RNA配列選択的に結合するRNA結合タンパク質PUFを改変し、様々なRNA配列に結合する人工PUFタンパク質を作製してきました。そこで、種々のRNA配列に対応するPUFタンパク質とRNAメチル化酵素METTL3/14、脱メチル化酵素FTOとの融合体を作製し、PUF結合配列近傍のアデノシンの特異的なメチル化やm6Aの脱メチル化に成功しました。様々な生命現象におけるRNAメチル化の役割の解明や創薬標的の開拓につながることを期待されます。

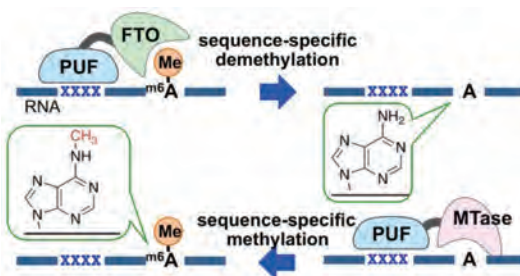


図2 RNA結合蛋白質PUFとメチル化調節酵素との融合体による配列選択的RNAメチル化制御

レヴィ小体病におけるLimbic-predominant age-related TDP-43 proteinopathyの病理学的、臨床的、遺伝的特徴

京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座特定助教 上村 麻衣子

Limbic-predominant age-related TDP-43 encephalopathy (LATE)は、TAR-DNA結合タンパク質43 (TDP-43)の凝集体の蓄積を特徴とし、高齢者の脳内で多く認める病理所見です。LATEは、アルツハイマー病(AD)の他、パーキンソン病やレヴィ小体型認知症などに代表される「レヴィ小体病(LBD)」にも多く合併します。

私達は、LBDに合併するLATE(LATE-LBD)について、病理学的、臨床的、遺伝学的特徴を明らかにしました。まず私達は、米国ペンシルベニア大学神経変性疾患研究センターに保存されている病理検体とデータベースから、下記4つのコホートを抽出し、比較・分析しました。

- ①LBDに合併するLATE(LATE-LBD) (n=313)
- ②ADに合併するLATE(LATE-AD) (n=282)
- ③LBDとADの混合病態に合併するLATE(LATE-LBD+AD) (n=355)
- ④正常高齢者脳に見られるLATE(LATE-Aging) (n=111)

【人口統計学的解析】

人口統計学的解析では、4つのコホートすべてでLATEは年齢と関連しており、LATEの頻度は、LATEはLBD+ADのコホートで最も頻度が高くなっていました。LATEは、AD病理およびLBD病理それぞれに関連して合併頻度の増加を認めました。

【病理学的解析】

病理学的解析では、LATE-LBDとLATE-ADの海馬での病理像および分布の違いが明らかとなりました(図1)。TDP-43の神経細胞質内封入体は、LATE-LBDとLATE-ADの間で海馬の分布が異なっており、LATE-LBDではCA3領域に多く、C末端が切断されたTDP-43からなる微細な神経突起を主にCA2-CA4領域で認めました。これらの微細な神経突起の一部は、LBDの特徴病理であるリン酸化 α -シヌクレインと共局在していました。LATE-LBDとLATE-ADは脳全体への広がり方も異なっていました。私達は、その病理学的特徴からLATE-LBDの病期分類を行い、LATE-LBDは4段階のステージで脳内を広がっていくことがわかりました(LATE-LBDステージ)(図2)。

【認知機能解析】

LATE-LBDの認知機能評価では、LATEは、LBDのサブタイプやAD病理とは独立して認知機能障害と関連していました(図3、左)。また、LATE-LBDステージが進むほど、認知機能障害も高度となっていました(図3、右)。

【遺伝学的解析】

LATE-LBDの遺伝子学的解析では、TDP-43プロテオパチーのリスク多型として知られるTMEM106B rs1990622およびGRN rs5848の遺伝子多型が、LATE-LBDの発症頻度およびLATE-LBDステージの程度との強い相関を認めました。

以上のように、本研究ではLATE-LBDの臨床病理学的および遺伝学的特徴を明らかにしました。これらのデータは、LBDの病理病態の多様性を示しており、今後、LBDの臨床試験の際には、このLBDの多様性を考慮して患者群をリクルートする必要性がある事を示唆しています。このように本研究は、LBDのバイオマーカー探索や治療法に向けた研究にとって非常に重要な情報を提供しているものと考えます。

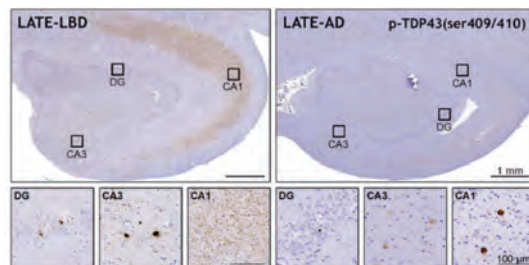


図1. LATE-LBDとLATE-ADの病理学的特徴の違い

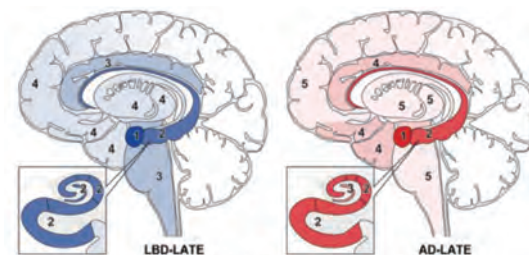


図2. LBDとADにおけるTDP-43病理の伝播様式の違い

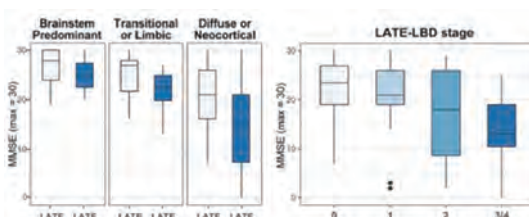


図3. LATE-LBDの認知機能障害 (左: LBDサブタイプ、右: LATE-LBDステージ)

奨励賞受賞のご挨拶

京都大学化学研究所 今西 未来



この度は、日本女性科学者の会第28回奨励賞を賜り、誠にありがとうございました。選考に関わっていただきました皆様に御礼申し上げます。また、今回の受賞研究に直接携わっていただいた学生さんをはじめ、ご指導いただきました先生方、研究室のメンバーや共同研究者の皆様にご心より感謝いたします。そして、いつも暖かく応援してくれている両親、夫、そして子供たちに心より感謝します。

私は、もともと膨大なゲノム中からどのようにDNA結合タンパク質が標的に結合しているのかに興味があり、DNA結合タンパク質に着目して、その認識様式の解明と人工タンパク質デザインへの展開に取り組んできました。しかし、約10年前にゲノム編集ツールとしてのCRISPR/Casシステムが発表されて以降、私の研究対象としてきたゲノム配列選択的な遺伝子機能の制御に関して、劇的な変化がありました。研究の方向性に悩んだ時期もありましたが、私の興味は、核酸の化学修飾や高次構造といった、配列情報にとどまらない核酸の機能にシフトしてきています。今回の研究では、RNAメチル化修飾の検出法の開発という基盤技術の構築から応用展開まで、私にとって、また科学の流れにおいても、新しい分野で萌芽的な成果を発信することができたのではないかと考えています。このような賞を励みにさせていただき、今後も新たな研究を展開していきたいと思っています。

奨励賞受賞のご挨拶

京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座 上村 麻衣子



この度は、このような素晴らしい賞を賜り、大変感謝致しております。日本女性科学者の会のスタッフおよび審査員の先生方に、貴重なお時間を頂き、審査していただきましたことに厚く御礼申し上げます。

私は脳神経内科医として臨床業務に従事してきましたが、神経変性疾患が根本的な治療法を欠いている現実を目の当たりにし、患者さんやその家族への説明のたびに心が傷みました。この課題に対処するために、より良い診療を行うためには病気についてより理解する必要があると感じ、大学院に進学して神経変性疾患の研究を開始しました。

神経変性疾患の研究に従事する中で、私は「ヒトの疾患を理解するためにはヒトのサンプルを用いた解析が不可欠」という考えに至りました。そこで、米国ペンシルベニア大学神経変性疾患研究センターの機能的なブレインバンクを訪れ、Virginia Lee教授と故John Trojanowski教授に師事する機会を得ました。今回受賞した研究は、ペンシルベニア大学に在籍する人口統計学、臨床病理学、遺伝学の様々な専門家の先生方と協力して、1つの大きなプロジェクトとしてまとめることができました。このプロジェクトを通して、ヒト脳を用いた解析の重要性を再確認すると同時に、多くの専門家と協力してシナジーを形成する喜びを学びました。Lee先生とTrojanowski先生には、この学びの機会を与えていただき、心から感謝申し上げます。

また、私を支えていただいた夫の上村 紀仁先生、大学院生の頃から数多くのサポートを頂いた高橋 良輔先生、木下 彩栄先生、猪原 匡史先生、植村 健吾先生、そしてこれまで支えていただいた多くの方々に心から感謝申し上げます。

今回の受賞を糧に、私は患者さんやその家族が少しでも安心できるような研究を進めていく所存です。これからも精進し、より良い医療・研究に貢献できるよう努力してまいります。

功労賞受賞のご挨拶

愛知大学 名誉教授 功刀 由紀子



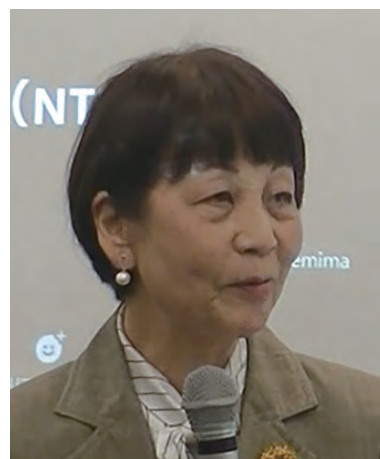
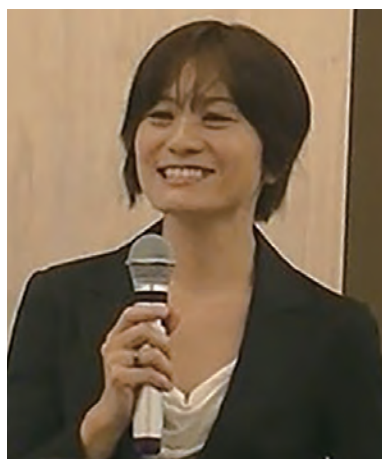
この度は、栄誉ある一般社団法人日本女性科学者の会功労賞を贈呈頂くこととなり、ご尽力頂きました関係者の皆様には心より御礼申し上げます。

地方の私立大学に在籍し大学運営に関与したことが縁となり、地域行政（県市町）における男女共同参画推進に加え、食や環境分野での政策立案や行動計画策定に長年関わって参りました。

日本女性科学者の会では、内閣府男女共同参画局や文部科学省等へ、女性科学者の増加や研究環境改善などに関する政策提言を継続して行っています。それらの提言は、男女共同参画基本計画等において、女性研究者の現状分析や研究環境改善に対する政策策定に大きな影響を与えています。しかしながら、国が策定する政策を地域における現場で機能させるためには、関与する人材育成を始めとする、現場での多大な努力が必要であることに気付かされました。花を咲かせるために種をまこうとしたら土がない、ことを実感した次第です。

地域行政に関与した当初、自分自身の経歴と対応している分野との相違に些か違和感を持っていました。しかし、多様な経験を重ねるうちに、このような意識改革を伴う人材育成には、いわゆる「理系」出身者が適任であると確信を持つようになりました。現在では、今まで関わってきた部署において、男女共に人材育成も促進され女性管理職も増加しつつあり、継続してきた努力がささやかではありますが成果を挙げていると感じております。

近年、学際的研究、特に従来の「文系」と「理系」を融合させた研究や取り組みが、社会における課題解決に重要な役割を果たすようになって来ました。純粋な科学技術領域から離れたフィールドでも、女性科学者の能力が必要とされています。女性科学者が、社会における広範囲なフィールドで活躍できることを、日本女性科学者の会から発信されることを期待しております。



日本女性科学者の会 第28回奨励賞・功労賞贈呈式は、2023年5月28日(日)に、共催であるお茶の水女子大学国際交流留学生プラザにて、ハイブリット形式にて開催されました。久しぶりに関東ブロック担当にて、対面で出席者も大勢参加し、奨励賞を受賞された今西未来先生、上村 麻衣子先生の受賞記念講演や、功労賞を受賞された功刀 由紀子先生の力強いお言葉を拝聴し、やはり対面の熱量は違うと実感いたしました。集合写真もスクリーンショットではなく、久々に華やかなものとなりました。

その後の懇親会にても、目と目で通じ合う意見交換が行われました。今後も、会員の皆さまの対面にてのご参加をおまちいたしております。

プログラム

- 1 主催者挨拶 日本女性科学者の会会長 跡見 順子氏
- 2 共催挨拶 お茶の水女子大学学長 佐々木 泰子氏
- 3 来賓挨拶 内閣府男女共同参画局長 岡田 恵子氏
イノベーション推進事務局長 松尾 泰樹氏
- 4 奨励賞選考経緯説明ならびに奨励賞贈呈式、功労賞受賞者挨拶

【奨励賞】受賞者：2名

今西 未来氏（京都大学・化学研究所・准教授）

「RNAメチル化の酵素化学的検出法の開発と選択的制御への展開」

上村 麻衣子氏（京都大学大学院・医学研究科脳病態生理学講座・特定助教）

「レヴィ小体病におけるLimbic-predominant age-related TDP-43 proteinopathyの病理学的、臨床的、遺伝的特徴」

【功労賞】受賞者：1名

功刀 由紀子氏（愛知大学・地域政策学部・名誉教授）

- 5 奨励賞受賞記念講演会
- 6 閉会の挨拶 跡見 順子会長



関東ブロック長
森 義仁 理事



第28回（2023年度）日本女性科学者の会 奨励賞 選考経緯

選考委員 後藤 典子 理事

第28回奨励賞は、2022年6月に本学会のHPに募集要項を掲載するとともに、News掲載、男女共同参画・女性研究者支援関連センターや施設がある80あまりの大学や研究機関へのメール案内、関連する学会のHPへの掲載等を介して、広く周知しました。2022年11月1日～20日までの約3週間を応募期間として募集したところ、全部で22名の応募がありました。内訳としては、薬学・化学・物理分野が7名、医学・生物学・歯学分野が11名、パラメディカル・看護分野が4名でした。応募者の中から、特に優れた応募者を12月の理事会にて選出し、薬学・化学分野2名、医学・生物学・歯学・パラメディカル・看護分野4名の計6名について、各専門分野の外部評価委員(全部で5名)に評価を依頼しました。



その評価結果を基に、3月の理事会にて奨励賞の趣旨にふさわしい候補者の最終選考を行いました。その結果、薬学・化学分野から今西 未来氏、医学・生物学・歯学分野から上村 麻衣子氏の2名に奨励賞を贈呈することが決まりました。

年々、応募者の実績が全体的に高くなる傾向があり、最終決定までには理事会において非常に慎重な議論を必要としました。学術的な実績や研究内容の独創性・将来性のみならず、女性研究者のロールモデルとして相応しいか、SJWSの会員として今後の活躍が期待できるか、という観点も考慮しました。今後、各分野を牽引する女性科学者として、益々のご活躍を祈念しております。

第28回（2023年度）日本女性科学者の会 功労賞 選考経緯

功労賞は、2022年6月の理事会にて要項の内容を承認した後、本学会のHPに推薦要項を掲載し、2022年11月1日から20日までの約3週間、功労賞の推薦を募集いたしました。そして、功刀 由紀子氏が12月の理事会にて最終的に推薦され、3月の理事会にて承認されました。

功刀 由紀子氏は、本会の理事、関西ブロック長、第8代会長を歴任され、長年にわたり本会の運営発展に貢献されました。

教育・研究活動においては、食品学、リスクガバナンス論を専門とされ、「食品安全学」および食品安全政策の構築に農林水産省消費・安全局との協働を通して取り組まれました。また、愛知大学副学長、常務理事として大学運営でも活躍された。愛知県の各種委員も歴任され、地域の環境行政の推進にも尽力されました。

以上の業績は、いずれも持続可能な開発目標の達成に資するものであり、女性リーダーとして目覚ましいご功績を持っていらっしゃるの、功労賞に値するものと理事会で決定いたしました。

Ⅶ. ブロック長挨拶

北海道ブロック長 小川 美香子理事

北海道大学大学院薬学研究院 医療薬学部門医療薬学分野 生体分析化学研究室 教授

ライフイベントによりキャリアをあきらめることなく、仕事もプライベートも楽しく充実して生きられる社会、女性・男性、既婚・独身、子持ち・子無しを意識する必要がない社会が必要だと考えています。北海道のキャッチフレーズ「その先の、道へ。北海道」のとおり、皆様の力をお借りし、真っすぐな道ではないかもしれませんが一歩でも先へ進みたいと思います。道外の会員の皆様も、北海道でのイベントの際は、旅行も兼ねて是非お越しください。美しい景色と美味しい食事とともにお待ちしております。

東北ブロック長 山田 恵子理事

前札幌医科大学医療人育成センター

今年度から東北ブロック長を務めさせていただくことになりました山田 恵子です。私は札幌医科大学を退職後、郷里である仙台に移住後、理事就任2期目の今期東北ブロック長に就任いたしました。札幌在住中に北海道女性科学者の会の代表として活動

した経験を活かし、他の理事（梅津 理恵氏、安藤 恵子氏）と力を合わせて活動していくつもりです。東北ブロックの今後の活動として2021年に復活した『東北ブロック通信』の充実化、新春懇談会の実施、そして会員から要望がありながらなかなか実現できていた情報交換会（仮）（研究の紹介や悩み事などを話せる会）を実現したいと考えております。新入会員を増やしていくことも課題の一つです。また、2025年1月開催予定の新春シンポジウムが東北ブロックの担当になっていますので、それに向けて会員同士のコミュニケーションを図りつつ、会員からの意見や提案を取り入れながら準備を進めたいと思っています。よろしくお願いいたします。

関東ブロック長 森 義仁 理事

お茶の水女子大学 基幹研究院 自然科学系 教授

SJWS会員のみなさま、こんにちは。今期、関東ブロック長を務めます森 義仁です。女性と科学の課題は、第二次男女共同参画基本計画に登場し、現在の第五次においてもその課題は掲げられています。それに伴い理工系学会や職場において急速にその関心が高くなり、2006年には政府予算も現実となり、その実証が求められてきました。SJWSの活動は、女性と科学に関わるジェンダー研究者からもその歴史的存在が認知されており、社会におけるこの急展開の中で、SJWSの活動は一つの規範的存在として、その志が男女共同参画学協会連絡会の活動に受け継がれていると思われます。SJWSはこの急展開に合わせて組することなく、また流されることなく、その規範的存在を持続するために、一歩引き、余裕を持った気持ちで見守る態度を続けるのがよさそうに思い、関東ブロックの会員のみなさまからの会員間の対話に関するご発案等を頂き、その裏方をブロック長の任務と考え務めて行きたいと存じます。

関東ブロック長 山本 眞由美 理事

岐阜大学 保健管理センター 大学院連合創薬医療情報研究科 医学部附属病院糖尿病代謝内科 教授

このたび、東海ブロック長を仰せつかりました。前ブロック長の永澤 秀子先生（岐阜薬科大学）からバトンを引き継ぎ、身の引き締まる思いです。

昭和33年の「日本婦人科学者の会」設立から20年後の昭和53年に第1回東海支部会なるものが開催されたと聞いております。猿橋 勝子先生（当時、東邦大学理事、客員教授）に東京からお越しいただいた特別講演では、「関東、関西に続いて、東海の皆さんが頑張らなくてどうする」という叱咤激励もあったとか。猿橋先生が女性として初めて日本学術会議会員に選ばれたのが昭和55年ですから、婦人科学者同志のつながりが今以上に重要であった時代だったと推察します。東海支部発起人のひとりであった私の母は、特別講演の後の懇親会がとても楽しかったと機嫌良く帰宅してまいりました。当時中学生だった私は、なぜか鮮明に記憶しております。自分と同じような“職業婦人”は周りに少なく、ロールモデルなどという言葉もなかった時代に、志を同じくする皆さんとの集まりが本当に心地よかったのでしょう。日頃のストレスを解消し、明日への活力をいただいたのだらうと思います。

平成8年に「日本女性科学者の会」へ、平成26年には「一般社団法人」へと進化を続ける本会ですが、その根底には同志との交流から得るエネルギーが支えではないでしょうか。日本のものづくりをささえるこの東海の地において、女性科学者の活躍は不可欠です。同志との絆を深め、次の世代が益々、発展、活躍することを応援するブロックでありたいと思っています。東海ブロック理事の沼野 利佳先生、小山 真紀先生はじめ、皆様に助けをいただいて、微力ながらブロック長の任を全うする所存です。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

関西ブロック長 川内 敬子 理事

甲南大学 フロンティアサイエンス学部生命化学科 准教授

今年度から2年間、関西・中四国ブロック長を務めさせていただきます川内 敬子（甲南大学フロンティアサイエンス学部）です。どうぞよろしくお願いいたします。私は、次世代を担う若手研究者の支援を継続するために、理事に立候補し、選出して頂きました。選出して頂いた会員の皆様の期待に応えられるよう努めてまいります。現在、当ブロックの5名の理事で、若手研究者を含めた会員同士のネットワークを作ることができる場を提供したいと企画を考えています。また、来年度（2025年度）の学術総会は当ブロックが担当します。ご協力のほど、何卒よろしくお願いいたします。

九州ブロック長 福原 正代 理事

九州歯科大学歯学部 教授

今回九州ブロック長になりました九州歯科大学の福原です。ブロック理事（原嶋 奈々江氏、福原 正代）を中心に、小川 由起子監事（前ブロック長）のご助言を得ながら、会員交流を図り、ネットワーク構築を進めたいと思います。2022年12月に九州ブロックが担当で開催したSJWS第14回学術大会のテーマ「多様性～研究の多様性、異文化交流～」を継続したいと思います。COVID-19流行に伴う活動制限対策として始まったzoom caféは今後も継続し、会員交流のツールとして活用します。それとは別に顔を合わせる機会を作りたいですね。学生や若手研究者が参加できる機会を設け、魅力のある会にして、次世代へ繋げたいです。アイディア、ご意見がありましたら遠慮なくお願いします。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

個人的には、母親の介護をしており、色々と情報交換をしたいです。

【2021年度会務ならびに事業報告】

1. SJWS主要会議の開催状況

定時会員総会

2022年5月22日(日)、オンライン会議

【審議事項】

- (1)2021年度会務ならびに事業報告
- (2)2022年度会務ならびに事業計画
- (3)2021年度収支決算と監査報告
- (4)2022年度予算案

【報告事項】

- (1)役員候補者選出規則改定について
 - (2)会員規則改訂について
 - (3)慶弔規則制定について
 - (4)学術誌投稿規定等の変更について
 - (5)2022年度SJWS賞贈呈式について
- ※審議事項は、すべて提案どおり承認された。

【理事会】 ZoomによるWeb会議

第1～5回通常理事会(第50、52～55回)

2022年6月13日(日)

2022年9月25日(日)

2022年12月11日(日)

2023年3月5日(日)

2023年4月16日(日)

第1回臨時理事会(第51回)

2022年7月31日(日)(Zoom会議)

2. 出版活動

SJWS NEWS: 2022年9月131号、2023年3月132号

日本女性科学者の会学術誌: 2022年22巻(電子版)

3. 奨励賞・功労賞の贈呈

第27回2022年度奨励賞・功労賞贈呈式ならびに奨励賞受賞記念講演会

日時: 2022年9月26日(日)、オンライン開催

【奨励賞受賞者】

飯間 麻美氏(京都大学 助教)

星野 歩子氏(東京工業大学 准教授)

櫻井 香里氏(東京農工大学 准教授)

【功労賞受賞者】

今榮 東洋子氏(国立台湾科学大学工程技術研究所講座 教授)

4. SJWS主催事業

・第27回奨励賞・功労賞贈呈式・本会推薦、第

18回日本学術振興会賞授賞式・奨励賞受賞記念講演会

日時: 2022年5月22日(日)

プログラム

主催者挨拶: SJWS会長 跡見 順子氏

来賓挨拶: 内閣府男女共同参画局長 林 伴子氏

文部科学省科学技術・学術政策局長 千原 由幸氏

科学技術政策担当大臣 小林 鷹之氏

奨励賞選考経緯説明ならびに奨励賞贈呈式

功労賞選考経緯説明ならびに功労賞贈呈式、

功労賞受賞者挨拶

第18回日本学術振興会賞授賞式

受賞者写真撮影

奨励賞受賞記念講演会

閉会の挨拶: 賞選考担当理事 後藤 典子

・日本女性科学者の会 第14回学術大会

「多様性～研究の多様性、異文化交流～」

開催日時: 2022年12月4日(日)

開催場所: オンライン

特別講演:

①池田 弘氏

九州歯科大学歯学部生体材料学分野 准教授

「歯科におけるデジタル化と新規材料」

②城崎 由紀氏

九州工業大学大学院工学研究院 准教授

「女性研究者による学生を中心とした

国際ネットワークの構築」

・SJWS新春学術シンポジウム 2023

開催日時: 2023年1月7日(土)

開催場所: オンライン

総合司会: 小川 美香子

プログラム:

第1部: 女性研究者ロールモデル講演会 “視座を高め、キャリアのNEXT STEPへ”

共催: 北海道大学ダイバーシティ・インクルージョン推進本部

第2部: 学術講演会

・SJWS会員向けサイエンスカフェ2023春

SJWS関東圏ブロック&SJWSサイエンスコ

ミュケーター&SJWS会長企画&山本真紀・

城戸佳織SJWS会員勉強会合同企画

開催日時: 2023年3月4日(土)

プログラム：

第1部:「臥位身体チューニング」(講義と実技)

講師：跡見 順子

開催場所：東京農工大学

第2部：会員交流会

・SJWS関西・中四国ブロック企画「女性研究者
支援の現状と課題：よりよい未来を目指して」

開催日時：2023年3月9日(木)

開催場所：オンライン

総合司会：島田 緑 (山口大学 共同獣医学部
獣医生化学 SJWS理事)

5. SJWS参画事業への参加

◆女子中高校生夏の学校

「抗原抗体反応～コロナウイルス検査から食
物アレルギー検出まで～」

開催日：2022年8月8日(日)・9日(月)

開催場所：オンライン

◆男女共同参画学協会連絡会

年3回の連絡会運営委員会に参加し、報告書
を提出

第20回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

開催日：2022年10月8日(土)

◆国際婦人年連絡会主催

2022年度第6回セミナー(SJWSが座長を務め
る環境委員会担当)

開催日：2023年2月23日

開催場所：オンライン

「持続可能な農と食への展望 ～アグロエコロ
ジーと小規模・家族農業～」

講師：関根 佳恵氏(愛知学院大学経済学部教授)

◆クオータ制を推進する会(Qの会)の活動への参画

担当：大倉 多美子監事、浜田 恵美子理事、
城戸 佳織会員

【2023年度事業計画】

1. SJWS主要会議の開催予定

・定時総会：2023年5月28日(日)

・開催場所：お茶の水女子大学(オンライン併用)

・理事会：年5回

2. 出版活動

・SJWS NEWS、日本女性科学者の会学術誌の
刊行

3. 奨励賞・功労賞の贈呈

・第28回2023年度奨励賞・功労賞受賞式ならび
に奨励賞受賞記念講演会

開催日：2023年5月28日(日)

開催場所：お茶の水大学にて対面・オンライン開催

4. SJWS主催事業：

・例会

・新春学術シンポジウム

5. SJWS参画事業への参加

・女子中高校生夏の学校2023への参加

・第21回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム
への参加

・JNWESの活動

第19回女性技術者と科学者の国際会議
(ICWES19)に参加(山本 真紀会員)

・国際婦人年連絡会

・クオータ制を推進する会(Qの会)の活動への参画

6. 外部団体事業への後援

7. ブロック活動

※議事録はホームページの会員専用ページに掲載
されています。

編集：沼野 利佳・小川 美香子・篠原 美都

発行所：一般社団法人 日本女性科学者の会 ©

事務局：〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1

東北大学金属材料研究所・新素材共同研究開発センター

TEL/FAX：022-215-2199 E-mail：office@sjws.or.jp